ヨーロッパ〝気楽〟な旅（その2）

# オリンピック・メダル

古林喜楽
え・中西勝

むかし初めてドイツへ留学したときには、船旅であったので、大きなトランクに、荷物を何もかもどんどん詰めこんで、もって行ったものである。八年前の二度目のときは飛行機で、荷物の目方に制限があるので勿論そうはいかなかった。土産物は嵩ばらない軽いものばかりにしたが、それでも空とぶ旅は初めてのこととて、羽田を飛び立ったときまではよかったのであるが、ヨーロッパ各地を廻っているうちに、だんだん荷物がふえ、飛行機に乗るたびごとに、超過料を千円ほどづつとられた。しかしこれ位の超過料ならとたかをくくって、原本もしこたま仕込み、最後にローマから羽田へ立とうとしたら、なんと二万円ほどの超過料を言いわたされた。一時間そこそこで飛べるところの場合と、ローマから羽田へ飛ぶのとでは距離が違うということを、すっかり忘れていたのがこちらのうかつ、こんなことなら着古した下着や洋服外套なんかすててしまって、日本で新調した方がよっぽど気が利いているのにと地団太を踏んだが、出発間ぎわのこととてあとの祭りであった。さすがに今度は三度目である。土産物も、もってゆかされるもの、向うでもらうであろうものまでも予め計算の中に織り込んでうまく切り抜けた。

荷物もさることながら、土産物となると、軽くて小さくてシャレたものということで、みなが一応苦労をする。いろいろ考えて調えたものが受けたりする。この前のときには、自分が着用するためにと持っていった西陣や博多織のネクタイが目をひき、いいネクタイだなァといってひとがさわりに来たりした。あるドイツ人に一本を贈呈したら、お返しになんと電気ひげそり器をくれた。尤もドイツでは二百ボルトであるので日本では使えなくて、折角のひげそり器も新品のままいまだにほったらかしになっている。銭別にもらったオルゴール付きのライターも大もてにもてた。メロディーが青いダニューブのさざ波ときていたので、煙草に火をつけるごとにみんなが耳をかたむける。パリで

はこのため若い乙女にあとを追っかけ廻わされたりした。今度も自分が調えたものよりは、これ又餞別にもらった広重の記念切手とオリンピックの記念メダルとが大受けであった。こんなことなら記念切手もオリンピックのだったらと、あとで帰らぬ後悔をした。せっぱつまって困ったときに、このオリンピックのメダルが何度ものをいった。

八年間のあいだに、ヨーロッパではタクシーが不自由になった。流しがない。タクシーを利用するぐらいのものなら皆自家用車をもつようになったので、まちを流すというようなぜいたくなことをしていたら、タクシー会社が成り立たないらしい。ハンブルグでは四人に一人が車をもっているというから、タクシーを利用するものが激減するのも無理がない。タクシーを拾おうと思えば、電話でよぶか、たまりにまで足を運ばなければならない。フランクフルトはづれの旧蹟を訪ねていた時のことである。その日は暑い日であった。帰りにみんながタクシーを呼んでくれという。一行は社長連中。ベンチにへたばったまま、タクシーのたまりまで歩いてくれない。流しはないのだといっても通じない。思案にくれたとき、フト街角に小さな銀行が見えた。さっそく飛びこんで電話をかけてもらい、お礼に例のメダルを進呈したら、二度三度催促の電話はかけてくれるし、一行のところまで出向いてきてくれ、タクシーに皆をのせて見送ってまでくれた。田舎の工場見学のときも、ぶっつけの突然ではあったが、簡単に話がまとまった。夜は夜で、この上なく愉快なふん囲気のエッペルワイン（りんご酒）をのますところで、隣りの席にたむろしていたドイツ人の若い男女のグループとオリンピックの話を交わしているうちに、メダルを一個記念に進呈したら、あとは合流してこの世の天国となり、のんでは歌い、歌ってはのみ、最後には彼等がわれわれ仲間に、エッペルワインの入った大きな壺を贈呈してくれた。

ホテルの電話交換嬢に、たびたび電話のお世話になったので、広重の記念切手を捧げたら、彼女は喚声をあげつつ、私の手の甲にチュッと接吻してくれた。これがオリンピックの記念切手であったら、いかが相なっていたことであろうか。

もってゆく土産ものだけでなく、こんどはもって帰る手土産に一苦労する。ルーヴル美術館の名画の複写など、思いがけないところでものをいうものであることを知ったのは、昔の初旅のときのことであったが、今度は時間の制約された団体行動にしばられて、絶好のチャンスを逸した。しかし三度みるルーヴルではあったが、同じ絵をみるごとに、新しい発見と新たな感激を覚えるのは、全く心にくいばかりであった。これでは日本の画家の卵たちがパリ詣うでをして、絶望感をいだくのも無理がない。それにしてもこのルーヴルが日曜と祭日とは、無料で入り放題というのは、うらやましい限りである。心ここにあらざれば見れども見えずとは言うものの、こちらは心どころか見るものさえない様は、全くうたた荒涼というべきであろう。いま神戸に立派な美術館をつくろうという動きが出ているらしいが、今からでもおそくはない。ぜひこれは実現してもらいたいものである。もってゆく土産ものがまた一つ増えるという副産物も出てこようというものである。

（神戸大学教授）

□ずいひつ□

# 神戸と阿波踊り

内村直也
え・中西勝

昨年、私の長男が、神戸の娘さんと結婚したので、神戸とは急に縁が深くなった。その娘のお祖母さんが、山手に一人で住んでいるので、大阪までくれば必ず電話をかけ、時間の余裕があれば、神戸まで足をのばす。

また、この四月には、友人のO君が神戸で結婚式をあげ、その媒酌人を引きうけたので、こちらも旧婚旅行のつもりでのんびりと妻と汽車旅行をし神戸で日を過ごした。

オリエンタルホテルにも数回泊ったし、ニューポートホテルにも泊った。花隈も見物したし、キングスアームスのスペシャル・ビーフ・ステーキも賞味した。O君の案内で、「蛸の壺」のタコ焼きに酔って、壁にいたづら書きまでした。

「山の香りと海鳴りの音が、こもごもに感じられる」という神戸の街が、私の一年一年の中で、数日を過ごす、楽しみの土地となった。

こんなことから、今年の阿波踊りには、「神戸っ子連」に加えてもらって徳島まで行ってきた。

実は昨年「蛸の壺」でO君から話を聞かされた時から、是非とも参加させてもらおうと思って、手帳の予定表の中に記入しておいた。それが実現したのである。予定表に入れておいても実現しないことのほうが多いくらいなのだが、こんなにうまくいったのは、O君のお陰である。

さて、徳島の阿波踊りだが、噂さにたがわず、非常に面白かった。面白いというよりも、私にはなにかこう、少し大げさにいえば、日本のエネルギーのようなものを目のあたりに見る思いがした。

日本全国から、これだけの人が集まり、揃いのゆかたで三晩踊りぬく、ということは、いかにものんびりした話である。平和日本を象徴するかのようだ。しかし、実際に踊りの列に加わって、汗びっしょりになって、群衆の間を行進していくと、

「踊らにゃ損、損！」という歌詞が、そのまま実感としてわいてくる。

もちろん、はじめて参加した私に、うまく踊れるはずもないのだが、しばらくねり歩いているうちに、度胸がついてきて、リズムにのって、自己流にステップをふむことで結構たのしくなっていった。

酒がはいっていて、かなりいいご機嫌の若い連中が多い。これが女性をまじえて、他の未知の「連」と、もみあい、へしあいする。どうしてこれで喧嘩がおきないのだろうと、まづ私は不思議に思った。

「これだけは、徳島の人間が、誇りにしているんですよ。ほかの土地だったら、とてもこうはいかないでしょう」

と、土地の人が説明してくれた。それでも一と晩のうちに、たった一回だけ、私は殴りあいの光景を見た。同じ「連」の二人の若者が、一人の女性を中心として、ぶん殴りあいをした。きくところによると、一人のほうがあまり女にしつっこくするので、見るにみかねて先輩が制裁を加えたのだということであった。

他の「連」との間にいざこざがおこらないということは、参加者がみな自制をしているからであろう。この点で私は日本人というものをはなはだ心強く思った。殊に若者たちが、あり余るエネルギーを発散させながらも、街の人たちの指揮に従順に従っていることは、大変気持がよかった。

わが神戸っ子連には、大鵬のように、巨大でしかも体の柔軟な、踊りの名手岡本さんがいる。うっかりして「連」から取り残されそうになっても、この巨大な人がどこからでも見えるので、大変便利だった。

神戸新聞の荒川部長は、大ぜい参加した神戸っ子連男性陣の中で、ただ一人上着を持参した紳士である。この人は、酒も強いが踊りも上手のようであった。「神戸新聞連」の旗がいつも最後尾になびいていた。

鳥追笠をかぶった女性たちが日本女性の伝統的な美を発揮して美しかった。顔の一部分しか見せないところに、日本人の祖先の智恵と美的感覚が感じられる。

阿波踊り
　鳥追い笠に
　君　涼し

の一句を小泉美喜子さんに献じた。

踊ってばかりいては周囲の状態がわからないので、後半私は商売意識をはたらかせて、「連」をぬけだし、見物の桟敷にもぐりこんだ。次から次へと三味線、鉦、太鼓にのって「連」がくりだされてくる。先頭はみなオーソドックスな踊りだがなかごろ以下は、自己流である。観衆の拍手に迎えられて、桧舞台でもふむつもりで、緊張して一生懸命踊っている老若男女の姿は、大変に微笑ましいものであった。

結構疲れた。日頃使わない筋肉を動かしたとみえ、体のふしぶしが痛かったが、あとの気分ははなはだ爽快だった。台風のために帰れなくなり、ついに一日小松島で無駄な日をおくったが、こういうのんびりした時間を持ったことも、いまになってみれば愉快である。

（劇作家）

素晴しいカット

十字屋洋服店

元町通５丁目
㉞０２１９
㉞２９３８

北欧の銘菓

幣社の登録商標

YŪHAIMU CONFECT

□ピラミッドケーキ
□バウムクウヘン
□クッキー
□ムンデット
□シモン

ユーハイム
コンフェクト

本社・工場　神戸熊内町１（市立美術館東隣）
熊内店　TEL. 22－2336・1164・1165
三宮店　神戸三宮生田筋（階上喫茶室）
TEL. 33－7343・0156・4314

□神戸っ子放談□

# 不言実行あるのみ

## 野沢幸三郎（野沢石綿セメント株式会社社長）

野沢幸三郎氏は、神戸でも有名な毒舌家。その毒に当てられて泣かされた人も多い。もっとも、悪意を含んだ毒舌ではないから、いつまでもそれを根にもたれて、恨みを買うというようなものではない。いわば、陽気な毒舌家といえよう。

インタビューの間、氏の口からポンポン威勢よく飛出す毒舌に、本誌編集部一同、あっ気にとられたものの根は善意にみちた、信念の人とお見受けした。

### わんぱく時代

「最近の青年達をみていて痛感するのだけど、どうもみんな元気がないね。どいつもこいつも腰抜けばかりだ全く情ないと思うよ。

写真は野沢社長

私は、海外旅行などで外国の事情をよく見てくるんだが、独立国で軍備を持たないのは日本だけじゃないか。こんなバカな話があるか、というんだよ。永久中立国たるスイスでさえ、ちゃんと軍備はある。私は徹底的な再軍備論者だ。青年に軍事教練を強制して、彼らの性根を鍛え直す必要があるんじゃないかと思うね。

私の若かった頃のことをいえば、それはもう元気なものだったよ。子供の時分には、しょっちゅうけんかをして、生傷のたえまがなかったほどでね。中学校は同志社にはいったのだが、ここでも手のつけられないわんぱくぶりを発揮したものです。先生をなぐったりするのは平気だった。あんまり悪いことをしすぎて、3回停学処分をくらってしまい、4回目にはとうとう退学させられてしまってね。(笑) 三井物産にいた叔父が、ちょうど同志社の理事をやっていたものだから、えらく往生しよってね。(笑) まあ、そんなわけで私は、相当のわんぱく生徒だったといえるな。だから、うちの息子でも小さい時など泣かされて帰ってくるのを見ると、腹がたってね。なぐりかえしてこいなんて叱ったものだ。(笑) これは私の教育方針なんだけれども、3人の息子達は、大学を卒業すると、みんな外国へ三年間勉強に行かせた。それも、日本人の一人もいない外国を選ぶことにしているんだよ。ロンドンやニューヨーク、パリ、あんな所は全然だめだね。日本人がいっぱいいるから、つきあいやらなんやらでロクなことを覚えやしない。カナダの田舎は、その点日本人が一人もいないからいいね。そういうふうにして息子達を鍛えているわけですよ。」

## 会社の経歴と現況

——野沢石綿セメント株式会社の経歴と現況を、ごく簡単にお話しいただきたいのですが。

「先代の野沢幸三郎が、外国産石綿盤(小平板石綿スレート)の輸入を始めたのが明治39年。この石綿盤は、不燃性の建築材料として斯界に大いに歓迎されました。明治42年に大阪府で、明治45年には兵庫県で、それぞれ府令、県令をもってこの〝石綿盤〟を、建築取締規則に防火材料として指定されたわけです。

年々、その輸入高が増加してゆくものだから、先代の主唱で石綿盤の国産化を計画し、大正2年9月に、日本石綿盤製造株式会社を設立しました。その時の資本金が10万円。本社は神戸、工場は阪神間本山村(現在神戸市東灘区本山町)に建設しましたから、今年で株式会社になってから51年目ということになりますね。

私が先代野沢幸三郎を襲名したのが昭和18年3月で、同時に、二代目取締役社長に就任しました。また、社名が現在の野沢石綿セメント株式会社となったのが、昭和24年4月でした。まあ、今日に至るまでいろいろの紆余曲折がありましたけれども、一応順調に伸展してきたといっていいでしょうね。

関東大震災の時など、即時製品の関西方面への供給を制限し、約1年間というものは、全能力を挙げて、震災地に供給、官庁・学校その他の罹災建物の復旧に、相当の貢献をしたこともあって、いささかなりとも社会のお役に立ってきたと自負しているんですよ。

現在は、工場が彦根、埼玉、神戸の本山、北九州市の門司にありますし、北海道の空知郡に石綿鉱山があります。東京と札幌には出張所を持ち、また全国12個所に営業所を持って、それぞれフルに操業をつづけている次第です。」

## 空理空論を排す

「私は、ハクシキタサイでね。博識多才じゃない、薄識駄才なんだ。(笑)

私は、一切の社交団体に入らぬことにしている。ロータリークラブにも、ライオンズクラブにも入っていないだいたい自分の仕事も、満足にできあがっていないのにそんな所に入って、うつつをぬかしているヒマはないん

でね。商工会議所の常議員も、今はやめてしまった。経済同友会にしても、ありゃあ君、傾財同憂会じゃないかしかも、みんな空理空論をもてあそんでいるだけで、ちっとも実行しない。経済同友会の立てた案なんか、みんな立ち消えじゃないかね。まるで幽霊みたいなもんだよ実行する能力も智慧もありゃしない。例えば、阪神港湾整備計画など、いい案だとは思うけれども、実行にあたって、政府の財政資金なんか当てにしていたのでは、どんな事業にしたって、完成するには100年もかかってしまうよ。本当にやる気があるのなら、世界銀行へ話をもっていけばいいんだ。だいたい神戸には、肩書の好きな者ばかり集まっていて、つかまえどころのない議論ばかりしているね。腰抜けばかり何人集まったって、なんにもならない。神戸の経済界を引っ張っていく人が、一人おればいいのだよ。その点人材のないのが淋しいと思うね。神戸の経済人で立派なのは、浅田長平氏（神戸製鋼所会長）と西山弥太郎氏（川崎製鉄社長）の二人だけだと思う。私はよく口が悪いなんて言われるけれども、普通のことを言ってるだけでね。要は、つまらぬ議論をもてあそぶのはやめて、不言実行するのみだということを言いたいわけだよ。」

## 今後の神戸に望む

「やはりなんといっても、産業をおこすことを、第一に考えなくてはならぬと思うね。そのためには、先ず道路を立派なものにすることを考えるべきだろうね。そうしなければ、人間も集まらないし、工場もできっこないんだから。だいたい日本という国は妙な国で、車だけ先にいっぱい生産しておいて、道路はあとまわしにするんだから、こんなバカげた話があるかというんだよ。

それから飛行場の問題がある。私は、国際飛行場のない都市に発展の見込みなし、と思っているんだ。そこで三田、三木のあたりを開発して、飛行場をつくり、専用道路をつくることを提案したいね。伊丹飛行場を買収するなんて、つまらぬことを考えてはだめだと言いたいね

大規模な自動車工業をおこすことも考えられていいんじゃないかね。日本だけの資本ではなにもできないから外国資本と提携してもいい、そういう工業を神戸に誘致したらいいんじゃないか。

まあ、これからはきびしい金融引締めの時代がやってくるわけで、前途多難を思わせられるんだけれども、私は、事業は不景気のどん底にあって始めるべきだという信念をもっているんだよ。」

## わが日常

「さっきも話したように、私はつまらぬ社交は大嫌いだ。それに私の顔は、どこへ行っても もてる顔じゃないしね。（笑）

ゴルフにしても、健康保持のために日曜日だけやるけれども、ウィークデーには絶対に行かない。仕事をほうりだして、ゴルフ場に出かけていったいなんになるか。ゴルフに行っても 実は腹の立つことが多くてね。紳士ぶっているだけで、所かまわず痰を吐くし、マッチは捨てるで、こういう手合いを人面獣心というんだ。（笑）自分の家では、だれもこんなふるまいはしないだろうから、結局みんな自分さえよかったらいいと思っているわけだね。道徳の低下は、実にひどいもんだよ。

私は歌も踊りも分らない。長唄だの、清元だのといっても、なにがなんだかさっぱり分らないね。せいぜい聞いていて、あくびが出るくらいのものだよ。（笑）趣味といえば、洋画を見ること程度で、それも日本人の描いた洋画は好きじゃない。（笑）

私は、晩9時半には寝て 朝の4時半に起きて1時間ほど散歩する。冬の酷寒の折りでも、ズボン下ははかないことにしていて、健康だけは自慢に なるだろうね。」

（文責編集部）

# 経済ポケット ジャーナル

## 神戸に万国博を誘致しよう

神戸商工会議所は九月十日、相楽園会館で神戸振興対策委、交通観光部会の合同会議を開いて、山陽新幹線と万国博の神戸誘致問題を協議した。その結果①山陽新幹線の早期着工と山ろくルートの選定②万国博の第二会場を神戸に誘致するの二点を決議、中央に強力に働きかけることになり、神戸市でも大阪府に分会場は神戸に持ってくるよう協力を要請した。九月十四日に来神した桜内通産相も金井県知事、原口神戸市長とオリエンタルホテルで会談「政府としても神戸に第二会場を持ってくることに別に異存はない。しかしまず地元で具体的な誘致計画をまとめてほしい」と述べ、県市協力して万国博誘致問題を進めることになった。

## 客船航路の新設構想

東海道新幹線試乗のため西下した松浦運輸相は九月十日神戸を訪問、神戸オリエンタルホテルでの記者会見で神戸を起点にした太平洋客船航路を来年十一月から開設するとの大構想を発表した。それによると南米への移民希望者が激減したため、現在五隻ある移民船がほとんど不要になったので、移民船を豪華客船に改造して客船航路を開こうというもの。いまのところあるぜんちな丸(一、〇八六四トン)と、ぶらじる丸(一、〇一〇〇トン)を四十年度の財政投融資で三億六千万円の経費をかけてデラックス船に改造、二億五千万円の航路補助費を出して客船航路にするわけ。寄港地はロサンゼルス、サンフランシスコ、ハワイのほか中南米諸国などを予定している。

## どうなる夢のかけ橋！

本州―四国を結ぶ夢の架橋問題は池田改造内閣になって小山建設相が登場してから雲行きがちょっとおかしくなった感じ。そこで金井県知事、原口神戸市長らが東京攻勢をかけたが、まだスッキリしない。九月十四日に神戸財界と懇談のため来神した河野国務相もこの点を記者団につつかれたが、「明石―鳴門ルートが第一順位であることに変わりはない。着工年度については調査結果やそのときの政府の財政事情によって遅れることもあろうが、小山建設相になったからといって政府の方針が変ったわけではない」と述べ、地元を安心させた。しかし松浦運輸相などの宇野ルート(国鉄の鉄道橋)優先発言などと微妙な食い違いもあり、これからの動きを見守る必要がありそう。

## 急げ港湾荷役の近代化！

神戸港の港湾労務者が組織している神戸港湾労働組合連合会(委員長大利幾造氏)はわが国で初めての港湾労務者の日曜、祭日休日制を要求して九月六日の日曜日にいっせいに休みをとり、このため港湾荷役は事実上ストップ、神戸港はマヒ状態になった。港湾労務者は正月の三日と七月二十日の海の記念日しか定休日がないのに、労務者は減少し、取り扱い貨物量は増大しているため、休日制を要求しているわけ。港湾荷役の日曜完全休日制は日本港湾労連と使用者側の全国港湾荷役振興協会が三年前から交渉しているが、神戸ではしびれを切らして実力行使に出たもの。その後中央交渉結果待ちということになり、日曜日も就労することになった。しかし日本では明治維新以来初めて日曜休日に踏み切ったわけで、日曜休日が欧米では常識化されていることを考えると日本でも港湾荷役近代化をもっと進めるべき時期にきているようだ。

(お詫び・9月号でJCとOAA協催のバザー売上金は「ひかりの町」運動に寄付とありましたがOAAの基金の一部にと訂正させていただきます)

＊KOBEオフィスレディ＊

川崎友子さん　(20才)　神戸銀行本店営業部暮しのコーナー勤務

三カ月前まで部長秘書だったというせいか、それとも人柄か、やわらかい笑顔の中に知性のある瞳。スポーツに手芸にと夢多いお嬢さんである。

OLYMPICの秋に楽しむ

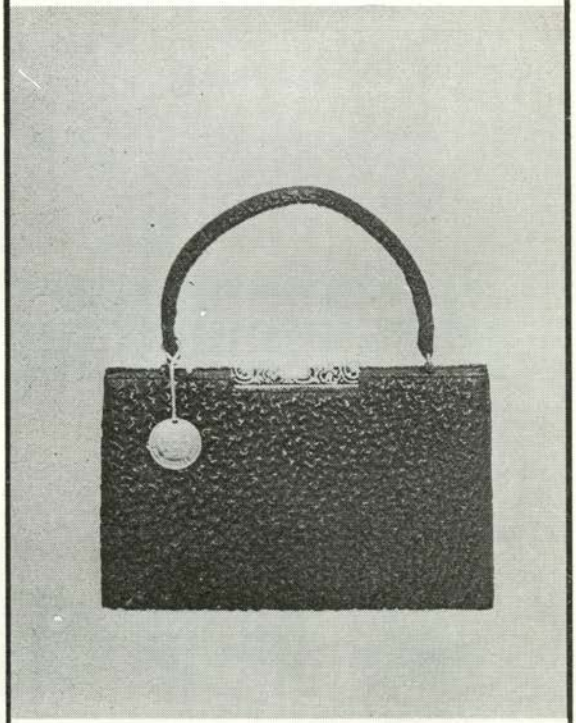
婦人帽子

マキシン

神戸・トアロード　東京・銀座３－２

ＴＥＬ㉝6711～３　ＴＥＬ(535) 5041

装いの美しいアクセント



特　選

ハンドバック

専門の店

シラサ

元町２　㉝0813

るぽるたーじゅ・コウベ ③

# 東部埋立地

松原新一　カメラ／西村雅司

鶴甲山から海岸までの地下を走るベルトコンベヤー。

はじめに、ささやかな笑い話を紹介したい。

先年、須磨浦公園のみどりの塔のすぐ近くに、陸から海に向けて鉄橋のようなものが架けられた。それがなんのために作られたものか、私はながい間知らずにきた。あれはなんだろうなと訝りながら、正確にそれを知ろうともしなかった。

ある日。省線電車に乗っていて、ちょうど電車がその現場付近を通りかかったときのことである。私の傍に立っていたふたりの中年の紳士が、こんなことを話しあっていた。

「あれはなにかな。ケッタイなものが出来よったで」

「橋とちがうか」

「なんの橋や」

「夢のかけ橋やろ」

「まさか。そんなはずはないで」
「そろそろ工事が始まったんとちがうやろか」
「そういえばそうかもしれんなあ」
むろん、このふたりの見当はまちがっている。だが、それがまちがいだと私の知ったのは、もっと後のことであって、正直なところ、私もこの紳士たちと同様の臆測をもっていたのである。田舎者の私は、かくも世情にうとい。市役所につとめている知人に、こっそりおうかがいをたてたところ、「冗談いうな、そんな早うに夢のかけ橋が始まるもんか」と笑われてしまった次第。だが、私や先ほどの紳士同様、善良な無知におちこんでいる人々が、実は大勢いるのではなかろうか。事実、私の友人、知人に向けて、あの須磨の鉄橋ようの設備がなにであるか、問うてみたのだが、ほとんどみな、「さあ、なんだろうなあ。知らんなあ」という頼りない返事しかできぬのである。しかも彼らは、すべてれっきとした神戸市民なのである！

実は、あの設備は、目下進捗中の東部埋立地に、土砂を運ぶためのベルト・コンベヤーである。くりかえせばそれを私が知ったのは、ごく最近のことにすぎない。自分の不明を恥じる他はないが、市でどのような事業がおこなわれているかを知っておくのは、市民としての一応の義務とも思われる。あえて今回のルポの対象に、東部埋立地の紹介をとりあげたゆえんである。

◇　◇　◇　◇　◇

神戸は山と海にはさまれた細長い町である。そこに工場その他の建物が、ぎっしりとつまり、もはやほとんど空地といえるものがない。だが、神戸が都市としての発展を企図するかぎり、産業をおこすこと、それが必須の条件とならぬわけにはいかない。とすれば、そのための《場所》をどこに求めるかが、当然問題になってくる。東と西には、もはやほとんど伸びていく余地はない。六甲山の裏側方面へ進むか、海を埋め立てるか、そのいずれかを選ぶ他はない。だが、前者の場合は、工場の立地条件からいって、難点が多すぎる。（たとえば工場用水、交通などの問題）そこで考えられたのが、海を埋め立ててそこに工場を誘致するという方法である。一般に経済の地盤沈下が嘆かれている神戸市の、それがいわばひとつの起死回生策であることはいうまでもあるまい。

埋立事業局の管轄下に、神戸港臨海工業地帯造成計画のたてられたのが、昭和28年。都賀川川口と、芦屋川川口の間の海を埋め立てようというわけで、ここが即ち東部埋立地である。本格的に事業に市が着手するようになったのは、昭和33年。また、大きな埋め立ての始まったのが、さらに遅く昭和35年。東部第1工区、第2工区、第3工区、第4工区とわかれて、現在着々と工事が進捗中であるが、そのうち第1、第2工区は、既にほぼ90％程度まで出来上っている。簡単に、今後の見通しを紹介しておくと、第2工区の完成は来年の夏、第3工区は昭和42年（着工は同38年で、現在約30％の出来上り）、第4工区は昭和44年（着工は今年）に、それぞれ完工の予定になっている。全体からいうと、現在までに約半分までは仕上ったということになるわけだ。

東部埋立地の規模は、どのようなものか。埋立面積の全体が、約150万坪で、最も広いのは、第4工区の54万坪である。護岸延長距離にして、約25ｋｍ。埋立土量が、七千三百二十二万$m^3$。この工事に要する費用には、実に328億円の予算が計上されている。

ところで、この埋め立て事業について、第一に気のつくことは、埋立土砂を裏山から運んでいることだ。ふつう海面を埋め立てる場合は、大阪にしろ、横浜にしろ、海底を掘って、その土砂を利用するというケースが多いのだが、神戸の場合は水深が深いので、それができない。そこで、裏山を削りとった土砂を利用することになったわけだ。その方が広い面積を埋めるのによいということもある。

そして、そのうえに、なお特色のあるのは、その土砂の運搬方法である。これは、土砂運搬のテクニックとし

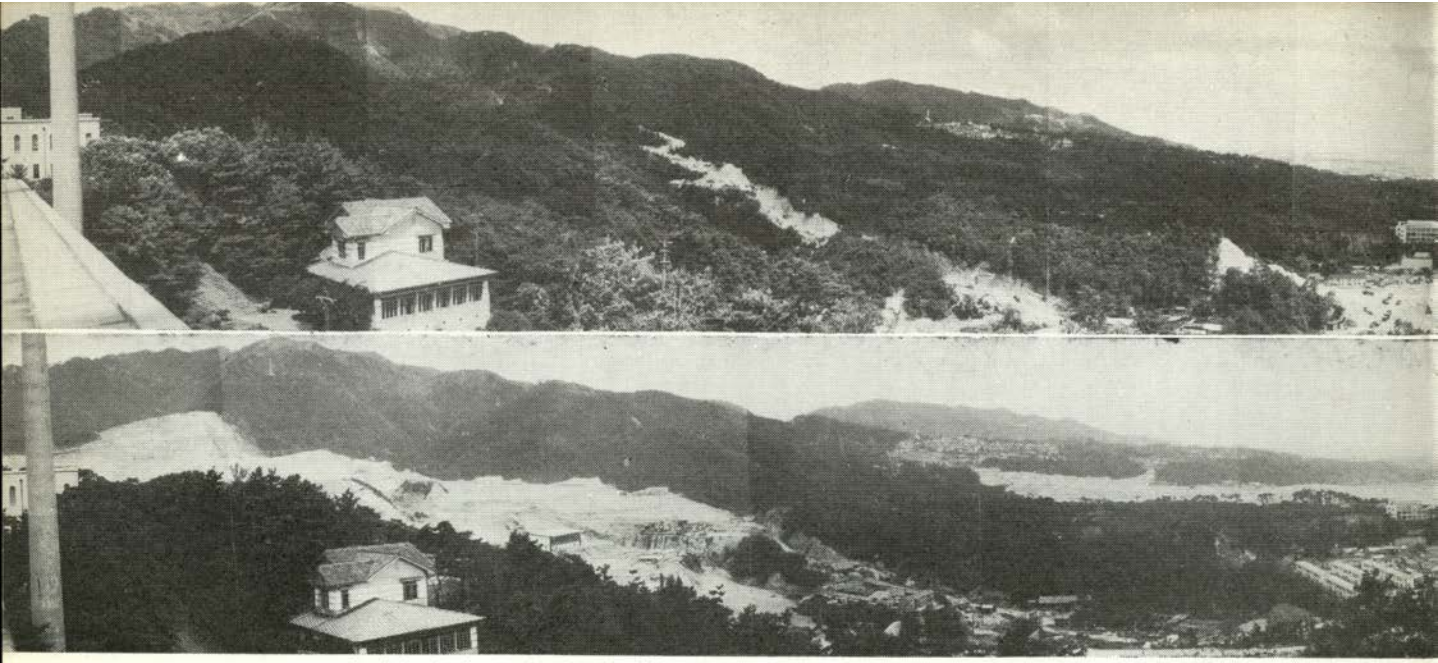
須磨浦海岸の桟橋と船への土砂積み現場。遠くに高倉山の土肌がみえる。

ては、世界の過去の例にてらしてみても、ほとんど画期的といっていい方法がとられている。

現在、東部埋立地に供給される土砂が採取されているのは、高倉山と鶴甲山と渦ヶ森の3カ所である。そこから工事現場まで土砂を運び入れる方法が、3カ所においてそれぞれに異なっているのだ。

高倉山の場合からご説明しよう。実は、冒頭にもちだした須磨浦海岸の桟橋は、高倉山の土砂を運搬してくるベルト・コンベヤーの一部にほかならない。これは、一の谷川の谷筋に沿って布設された高架式のベルト・コンベヤーである。桟橋まで運ばれた土砂を、そこから船（押船式土運船）に乗せて、約20kmはなれた東部埋立地まで海上輸送する。往復に約5時間かかり、夜の航海は不可能だから、一日に2往復している計算になる。現在4船団が動いており、埋立事業局の計画では、いずれこれを倍にしたいということである。なにしろ、この船一船団でダンプカー500台分を運ぶ、というのだから、相当の高能率をあげていることになる。ただ、悪天候に見舞われると、海上が荒れて航行不能になるのが、タマにキズだそうである。

鶴甲山の場合（着工昭和34年）はどうか。ここでも土砂を運ぶのにダンプカーを用いるとして、それを走らせる適当な道路がない。そこで、地下に海まで隧道を掘り、そこにベルト・コンベヤーを設置して土砂を運ぶという、卓抜な方法が案出された。このコンベヤーの距離が、3.7km。ブルドーザーで削りとられた山の土が、我々が乗る阪神電車、阪急電車、市電、国電などの鉄道、軌道や、歩いている道路の下をコンベヤーに乗せられて流れているわけである。この土砂で、第1、第2工区の埋立てに必要な分をまかなっており、また摩耶埠頭にもここの土がおくられている。運搬の始まった昭和36年4月から同39年10月までの運搬量二千四百万トン。年内に二千六百万トンをこえようという。これは、一本のベルトの運搬量としては、少くとも日本では新記録である。



着工当時の鶴甲山、渦ケ森の土取現場（上）と現在のそれ（下）。工事の進捗ぶりが歴然としている。

従来の記録では、北炭夕張の昭和19年から同38年に及ぶ20年間に石炭を二千六百万トン、という実績があるが、これは年数の点で比較にもならない。

渦ケ森の場合は、住吉川の川床を、ダンプカーを走らせて、土砂を運搬している。これは、ふだん住吉川にほとんど水の流れていない点に着目したものである。

以上の例を見ても分るように、土取場から海岸までの土砂の運搬の方法に、それぞれの場所に応じて、相当に工夫がほどこされていることに気づく。いずれの場合をとってみても、鉄道、軌道、道路などと、土砂の運搬施設との交叉が、注意ぶかく避けられていることである。今度の埋立事業の遂行において、この点での技術的な工夫が、もっとも難問題だったであろうことは確実である。つまり、いちどに大量に土砂を運び、しかも市民に迷惑をかけないで実行できる方法でなくてはならないわけで3カ所においてそれぞれ別々の方法がとられているのはホメられていいだろう。

特に、地下のコンベヤー・ベルトによる土砂の運搬を、埋立工事に利用するのなどは、世界でも初めての試みだというから市当局が自慢するのもうなづける。輸送コストもベルトがいちばん安価だという。ちなみにベルトを使用しようという考えは、工学博士原口忠次郎市長の発案である。

◇　◇　◇　◇

ところで、この海面埋立工事のために、被害を受けた向きがないわけではない。第1工区から第4工区にいたる一帯は、かつての灘五郷として有名なところだが、この酒屋さんが、まず埋立に反対した。というのは、海を埋めると、地下水の水位が変るおそれがある。これは地質学的にいって、十分に考えられるところであり、そうなると酒屋の宮水の水質が変ってしまう。変るというより悪化してしまうおそれがある。酒のよしあしは、宮水のよしあしで決まるといってもいいから、この埋立は灘の酒屋さんにとっては頭が痛いことである。灘の名酒

がまずくなっては、これは日本のみならず世界の損失でもあろう。そこで海面を完全に埋めてしまわないで、ごく小さな運河をつくった。これは、だから船の航行のためではなく、地下水の水位を変えないための処置である。灘の名酒保存のために、また世の愛飲家のために、この運河が十分に役割を果たしうるように祈っておきたい。

また、この埋立事業には、工場誘致のネライの他に、実はいまひとつの副産物がある。土砂採取後の裏山約65万坪が、住宅団地として開発されることになっているのである。ここに五千百戸の住宅が建設される予定だ。この計画の完成されるのは、まだ8年ほど先の話であるが、とかく住宅政策の貧困が嘆かれがちな、現在の原口市政にとって、名誉回復の事業となれば、これは市民にとってもひとつの利益であることはまちがいない。

なんだかホメてばかりいるようだが、問題がないわけではない。

まず懸念されるのは、土を削ったあと、山崩れ、崖崩れなどの災害がおこらないかということだ。その点、そういう心配のないように、土砂採取後すぐ平面になるような独立した山が選ばれているようであるが、念には念を、ということもあるから、用意周到ならんことを願っておきたい。

もうひとつの問題は、東部埋立地が、やがて工業地帯に化するのは結構であるが、そのとき、いわゆる公害の発生をどう処置するか、ということだ。これは、早くも問題が起っている。東部第1工区には、既に神戸製鋼所がはいって操業中であるが、工場の煙突から吐き出される媒煙や亜硫酸ガスなどが、ちょうど真北にあたる六甲山麓の団地一帯に流され、そのために洗たくものなどはいっぺんに赤く染まってしまう。そういう主婦の苦情を当局者は無視するわけにはいくまい。空気の汚染も、当然ひどくなる。鶴甲山、渦ケ森一帯に住宅団地がつくられるのはいいとしても、そこが工場誘致による公害のためにおびやかされるような事態になれば、ベッド・タウンとしての意味をなさなくなるのではないか。この心配は、決して杞憂とは思われない。神戸の発展が、工業の発展によって支えられなくてはならぬことはたしかだとしても、同時に、そこには、安らかな憩いの場をもつ権利のある多勢の市民が住んでいるのだ、という事実を、為政者は忘れるべきではあるまい。この公害問題をうち棄てておいて、工場と住宅とが一挙にできあがる、まさに一石二鳥だとよろこんでいるだけでは片手落ちのそしりを免れぬであろう。こういう批判は、既に一部でささやかれ始めているようだ。

最後に、東部第1工区の近くに住み、埋立てられる以前の海を、ひそかに愛し、海が目の前から消えてしまった現実に、ある悲しみを感じるという、沢野光枝さんという18才の少女の詩「消えた海」をここに紹介しておきたいと思う。

《わたしの海がなくなった　そこに
工場が立って　もう
わたしの海は消えてしまった　むかし
父さんが死んで　わたしは
かみきれに　さよなら
そうかいて　海にながした
わたしの知らない　遠いところへ　流れてゆけと
夕ぐれになると　わたしは　ひとり
海にきて　岸辺にほしてある
いっぱいの魚の　臭いのなかで
きらきら　きらきら　きらら　きら　きら　光る
海をみた　やさしい波のささやきが
遠いとき　父さんのうたった
子守唄に　似ているとおもった
海がわたしのまえから　もう　消えて
わたしは
わたしのこころを　眠らせる　たったひとつの
たいせつな　世界を　うしなった》

（詩集「わたしの海」より）

ウェディングの
手みやげに

アルモンド
本　店　神戸市生田区元町通２の43
直売所　神戸大丸・新聞会館秀品店
本店ＴＥＬ㊋2203

O-SHIBATA
柴田音吉洋服店
神戸・元町通４丁目　神戸　34－0693
大阪・高麗橋２丁目　大阪 231－2106

Akira Beauty Shop

美容室 あきら 西野 明

電話予約制

三宮本通り TEL㉝4461・6458

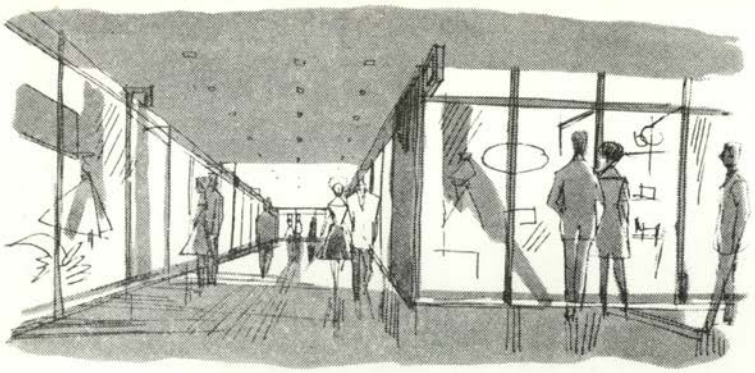
紳士服飾・婦人服飾

セリザワ

紳士服飾・大丸前㉝3900
婦人服飾・大丸地㉝4605
センター街㉝4624
三宮やまとやしき㉝1021

オリエンタルホテル　ア・ラ・カルト　（その4）

# 新しい散歩コース



・地下1階

神戸は散歩して楽しい都会である。

人や車の交通量も少いし、ひょっこりとびこんで思わぬ楽しい買いものができる。商店で、街路樹の枝に横文字看板のかげをひそめている店もある。こんな楽しみを求めて、阪神間はもちろん、京や大阪からも神戸の街へ散歩にくる人が少なくない。

そごう前あたりからセンター街を歩いて、元町通りへ抜けていくあるいはその反対のコースが三宮界隈の散歩の、いわゆるレギュラーコースである。それがすこし趣きをかえて、市庁舎の花時計のあたりをすりぬけて、京町の通りをすこし南へ足をのばす。と、すぐコーヒー色のオリエンタルホテルがみえる。この褐色の建物を背景に磯の香りをふくんだ浜風にゆれる柳のみどりは、ホテルの建物と互いになじみ合って、好ましい一枚の油絵的風景をつくりあげている。

もともと京町筋の両側の建物には外国の船会社のフラッグが風にひるがえり、海岸の建物の向うで碇泊中の汽船の高いマストが静かにゆれている……などと、いかにも神戸らしい異国情緒があふれている。

ホテルのいちばん南の端の扉を押すと、ひっそりした階段が地下へおりている。この地下道には真珠宝石、銀細工、時計、アクセサリー、机の上に飾ってみたいほど美しい外国製の医療品や薬品、化粧品、それに生花、清水焼、西陣絹織物、和紙工芸品、洋書雑誌などのしゃれたショウウィンドウが、軒をならべている。

すれちがう老外人とニッと微笑をかわして会釈のひとつもすれば「ハウアーユー」と話しかけてくる。

すこし疲れてくるとホテルのコーヒーショップが待っている。エスプレッソリー・コーヒー機でだすあっさりしたコーヒーの味に都会人らしい満足感がわきおこってくる。スープ、料理、サラダにコーヒーがついて五百円というランチが評判になっているが、さらに時分ごろだとその奥に、ホテルのグリル・アンド・プルニエがあって温い感じで食卓に円い照明をなげているモダンなシャンデリアをたのしみながら、アラカルテの気の利いた食事をしていると、シャンゼリゼの裏通りの食堂にでも座っているような感じがさっと頭をかすめる。

脂っ気のいけない人には一宝の神戸店で、名代のてんぷらやすしで存分に秋の食欲をみたすこともできる。

新しい散歩のコースを発見することはこの上もなく楽しいことである。

（カット・松岡寛二）